



川越市立大東西中学校 学校だより

きらめき

令和8年7月3日発行
第4号
川越市立大東西中学校
校長 小川 潤也

学校教育目標 『豊かな心をもち、たくましい生徒 ～ 夢や希望をもつ生徒 ～ 』
○自ら考え、自ら学ぶ生徒 ○豊かな心を育む生徒 ○心身の健康に努める生徒

あと1か月でできる成長～非認知能力の大切さ～

校長 小川 潤也

7月に入り、1学期も残り約3週間となりました。先日の6月の学校朝会では、生徒たちに「あと1か月、自分は何を頑張るか」というテーマで話をしました。

4月に新しい学年が始まってから約3か月。それぞれの学年で、生徒たちはさまざまな経験を積み重ねてきました。1年生は、中学校生活にも少しずつ慣れ、初めての定期テストや部活動など、小学校とは異なる環境の中で新しい挑戦を続けています。毎日の学校生活そのものが、大きな学びとなっています。2年生は、後輩を迎え、学校の中では「教えてもらう立場」から「教える立場」へと少しずつ変わってきました。学校行事や部活動でも中堅学年としての役割を担い、責任感が育ってきているように感じます。3年生は最高学年として、学校全体を引っ張る存在です。部活動では最後の大会、学校行事では中心となって活動し、進路についても真剣に考える時期を迎えています。一人一人が将来に向けて大切な時間を過ごしています。

この3か月を振り返ると、「思いどおりの結果が出た」「頑張った成果を感じられた」という生徒もいれば、「もっと頑張れたかもしれない」「悔しい思いが残っている」という生徒もいることでしょう。しかし、私が今回の学校朝会で伝えたかったことは、「もう1か月しかない」ではなく、「まだ1か月ある」という考え方です。1か月という時間は、決して短くありません。毎日少しずつ努力を積み重ねれば、人は必ず変わることができます。大きく変わる必要はありません。昨日の自分より少し前へ進めれば、それは立派な成長です。

そこで、生徒たちには「成長」とは何かを改めて考えてもらいました。成長というと、テストの点数が上がること、順位が上がること、大会で良い結果を残すことなどを思い浮かべる人が多いかもしれませんが、もちろん、それらも大切な成長です。

しかし、学校生活には数字では表すことのできない成長も数多くあります。例えば、「自分から進んで挨拶ができるようになった」「授業で勇気を出して発表してみた」「友達に自分から声をかけられるようになった」「提出物を期限までに提出できるようになった」など。このような変化も、間違いなく大きな成長です。こうした力は「非認知能力」と呼ばれています。少し難しい言葉ですが、簡単に言えば、テストでは測ることのできない力のことです。最後までやり抜く力、失敗してももう一度挑戦する力、人と協力する力、相手を思いやる力、自分で考えて行動する力などが、その代表です。これらの力は数字では見えません。しかし、社会に出てからも、仕事や人間関係、家庭生活など、人生のさまざまな場面で必要となる、とても大切な力です。

学校では学力の向上と同じくらい、このような非認知能力を育てることも教育の大切な役割だと考えています。「毎日自分から挨拶をする」「授業で一度発言してみる」「提出物を期限までに出す」「友達の良いところを見つけて伝える」など、小さな一歩を積み重ねることが、子どもたちを「なりたい自分」へ近づけてくれます。

ご家庭でも、日々の小さな成長を認め、声をかけていただければと思います。その一言が、子どもたちの自信となり、「次も頑張ろう」という意欲につながります。

残り1か月、生徒一人一人が自分なりの目標を持ち、「これを頑張れた」「少し成長できた」「なりたい自分に近づけた」と実感しながら1学期を締めくくれるよう、教職員一同、生徒たちを支えてまいります。保護者の皆様にも、引き続きご理解とご協力をお願いいたします。